

王政復古期フランスにおける産業主義と反産業主義  
—近代社会主義思想の形成過程に関する一試論—

岩 本 吉 弘

## [目 次]

### はじめに

|                                     |    |
|-------------------------------------|----|
| [1] 産業主義の基本性格 —セーとサン・シモン—           | 3  |
| [2] シスモンディの産業主義批判                   | 6  |
| [3] 産業主義的社会主義の成立                    | 10 |
| (1) サン・シモンの「新キリスト教」                 | 10 |
| (2) サン・シモン派と産業主義的社会主義の成立            | 12 |
| (3) 産業主義的社会主義の思想構造                  | 16 |
| [4] フーリエと「産業」                       | 19 |
| (1) 「文明」・「産業」・「商業」                  | 20 |
| (2) 商業批判と経済学史の転倒                    | 22 |
| (3) 反市場型ユートピアの導出                    | 24 |
| (4) フーリエの産業主義批判 —イギリス型社会発展へのアンチテーゼ— | 26 |
| (5) フーリエの思想と現代                      | 28 |
| [5] 産業主義と社会主義 —結びにかえて—              | 33 |

## はじめに

この20世紀の末において再び、「産業主義 industrialism の行きづまり」といった言葉がよく聞かれるようになった。一例を挙げると、例えばエコロジストたちは既存思想に対して要約次のような批判をしている。「エコロジーの最大の敵は『産業主義』であり、その意味で自由主義と社会主義とは、少なくともその所産において同罪である。両経済体制は、無限の生産力拡大、永遠の経済成長という目的においては一致しており、ただその方法論において異なっていたにすぎない。…『あらゆる伝統的な制約、そして自然による制約からの人類の無限の解放』という理想こそ、啓蒙の時代精神だった。その意味で両者はともに啓蒙主義の忠実な子供であり、それゆえに『無限の豊饒さ』、つまり『無限の自然の開発（搾取）可能性』を前提にしてしまう『限界』をも共有していた。」<sup>(1)</sup>

産業主義という言葉は現代では使用者によって非常に多義的で定義しにくいのだが、とりあえずそれを上記の『 』で示された内容で理解するならば、こうした批判は非常にわかりやすい言い方であり、また確かにそのすべてを否定する必要もないだろう。しかし実際の思想の歴史を仔細に見るならば、そう簡単な色の塗り分けは許されない。私は今「再び」と書いたが、それは1820年代頃の近代社会主義思想の形成期のフランスにおいて、後にマルクスとエンゲルスが「近代の生産諸関係の諸矛盾」を「反駁の余地がないまでに論証した」と評した<sup>(2)</sup>シスモンディが、自己の経済理論の目的は「産業主義体制 le système de l'industrialisme の失望」をあばき出すことにある<sup>(3)</sup>、また社会主義の未来社会像に鮮烈なモデルを残したフーリエが、「産業主義」とは「科学上の妄想」にすぎず「一掃」しなければならないと主張していた<sup>(4)</sup>状況を念頭に置いてのことである。

この王政復古期フランスの思想界は、帝政の崩壊とともに対外戦争と警察体制の桎梏から解かれ、極めて多様な諸思想が吹き出すように現れ交錯する時代となる。新しい社会理念を掲げたフランス革命はジャコバン恐怖政治から結局ナポレオンの軍事独裁へと向かい、怒濤のような大陸制覇もロシアの雪原にフランスの若者たちの累々たる屍を晒してついで去る。そして結局一巡りするように再びブルボン家と旧貴族、教会勢力が権力の座に戻ってくる。一方イギリスのめざましい産業発展は新しい国力のあり方を世界に見せつけるが、同時に1810年代のラッドライト運動、都市労働者の深刻な境遇悪化、恐慌の発生などその重い病弊をもあらわに示しだす。時代は政治体制も経済体制もすべて同時に疑問に晒して、今後のフランスの進路を定めるための多様な思想の営みを誘い出してくる。平和の到来と新憲章第8条がそれを可能にする。シャトーブリアンらの王党派とバンジャマン・コンスタンらのリベラリストの政治的対抗、J.-B. セーを支柱とした経済的自由主義者たちとその運動、サン・シモンとその弟子たち、フーリエとその弟子たち、シスモンディ、A. コント、さらにはブオナロッチィが回顧録を出版してバブーフの思想と行動を広

く世に知らしめることになるのもこの時期にあたる。要するに現代にまで系譜を連ねる思想潮流の非常に大きな部分がこの時期にその原型を現すのであり、我々がまだ目にしている思想の分岐がこの時期に準備されるのである。

人間とその社会にとって「産業」とは、また生産力の発展とは一体何をもたらすのか、その問いはこの「イデオロギーの孵化期」における大きなトピックであった。なぜならそれにどのような答えを与えるかが、フランスの社会と経済の進路を決める決定的なファクターだからである。本稿では、この王政復古期頃のフランスにおける産業主義思想と反産業主義思想の存在とその互いの相克の中から近代的な社会主義思想が形成されてくる過程を、セー、サン・シモン、サン・シモン派、シスモンディ、フーリエらの思想の相互関係の分析によって跡づけてみたい<sup>(5)</sup>。

(1) 丸山仁「エコロジーの政治学」、『講座・現代の政治学 第1巻 現代政治学の再構成』、田口・加藤編、1994、p. 251.

(2) 『共産党宣言』、『マルクス・エンゲルス全集』(大月書店) 第4巻、p. 498.

(3) Simonde de Sismondi, J. C. L., *Études sur l'économie politique*, t. II, Bruxelles, 1838, p. 160. 以下同書 t. I (1837) および t. II からの引用はこのブリュッセル版により、E. E. と略記する。

(4) Fourier, Ch., *Œuvres complètes de Charles Fourier*, éditions anthropos, t. VI, p. 28.

(5) 同様の課題と題材を扱ったものとして、すでに坂本慶一氏の『フランス産業革命思想の形成』(1961年) および『近代フランスの農業思想』(1987年) 所収の誠実に明晰な諸論文がある。本稿と併せて参照されたい。私は坂本氏の見解に賛同するところが多いのだが、しかし氏の解釈には、産業革命、農業革命といったイギリス経済史の発展図式をそのままフランスの思想家たちに押しつけて意義づけしようとする事による無理が目立つ。結果として本稿は、むしろその図式から外れる部分を強調することになった。

## 〔1〕 産業主義の基本性格 —セーとサン・シモン—

まず当時のフランスにおける「産業主義」とは具体的にいかなるものであったかということから見ていこう。この言葉は、現代社会学などで使われる意味は別にして、経済学史、思想史上の一般的な意味としては、18世紀後半頃に始まる新しい工業の発展と国民経済におけるその主導的地位の確立をはかる理論と運動のことと言っていいであろう（無論その大きな敵は重農主義とそれに基づく経済政策であった）。革命期からナポレオン時代におけるその具体的態様については、近年の諸研究によってかなり仔細に知ることができるようになったが<sup>(1)</sup>、その流れを受け継ぎ王政復古期の思想界に大きな影響を与えるのは、ナポレオンの失脚による平和の到来を待っていたように主著『経済学概論』の改訂版<sup>(2)</sup>を出版し、パリで経済学講座を開講するジャン・バチスト・セーであり、さらにその影響下でサン・シモンが、「産業主義 l'industrialisme」という固有の名称を創出することになる。つまり王政復古期に入ってセーの経済学に接したサン・シモンは、ナポレオン没落後の社会の新たな再組織のための原理をそれに求めようとし、「あらゆる種類の生産にもっとも好都合な事物の秩序」<sup>(3)</sup>の創出を唱えて、「すべてを産業によって、すべてを産業のために」をスローガンとする、後にみずから「産業主義」と名付けるプロパガンダを始めるのである。かつてアリックスやジェイムズらが評したように、革命期の政治的激変とナポレオン軍政を脱して先進産業国イギリスへの追いつき、追い越しを図ろうとした当時であって、セーの経済学は「『生産』という肥沃なる思想」に広くフランス人の目を向けさせる役割を果たす。当時「知識人階級の中で『国富論』を読んでいないものは多数いたが、『概論』を読んでいなかったものはわずか」であって、セーの経済学は彼らに「生産の未来と産業の社会的、政治的使命」についての新しい地平を開いてみせたのである<sup>(4)</sup>。

サン・シモンが感激したセー理論の特徴は、その独自の効用価値論によって、生産過程において「生産的サービス」を供給する三大要素たる土地、資本、そして industrie の3つを並置し（この industrie という言葉は、現在の意味としては産業と訳されて例えば工業とか商業とかの経済活動の領域を示すことが多いが、しかしその本来の意味としては、富を作り出すために発揮される人間の力能を指す言葉である。そしてこのセーにおける意味としても、このように彼が土地、資本、industrie と並置しているように、つまりは事物や自然力それ自体とは区別されて、それに対して人間の方から働きかけ有用なものを引き出してくる能力、つまり自然に対する人間の主体的働きかけといった意味で考えられていると言えよう<sup>(5)</sup>）。すなわち、巨大な自然力を初めて大規模に生産に応用することに成功し、自然と人間の主従関係の逆転に成功した「産業革命」という歴史過程の反映がそこにある）、さらにその三要素各々の所有者としての地主、（狭義の）資本家、「産業者 les industriels」という三大階級論をとり、そしてこの「産業者」階級に含まれる「企業家 entrepreneurs」と「労働者 simples salariés, ouvriers」という二階層間の関係を本質的に無矛盾

に描いたことに明瞭に現れている。

つまり彼が今後のフランスの経済発展を実践的に担う主体としてあえて一範疇として強調する「産業者」、「企業家」といった概念は、要するに無為徒食であるかそれとも自ら生産的労働に携わっているかということを分岐点として析出されてくるものであり、結局彼は、イギリス経済学が主要に依拠して剰余価値論の系譜を作り出す産業資本家—賃労働者という関係、生産手段の所有—非所有という関係をあえて理論的契機には含めずにその中に塗り込めてしまう<sup>(6)</sup>。そしてここからは、等しく「industrieの所有者」である企業家と労働者との「産業者」階級が担う新しい社会においては、あたかも個人の能力や才能によって高度の社会移動が可能であるかのような仮象的世界（一種の純粋な市民社会とでも言えればいいだろうか）が導き出されることになるのである（サン・シモンはこのユートピア性に感激しマルクスは「俗流経済学者」と罵倒する）。そしてさらにここに、生産が消費を生むとして過剰生産を否定する彼の販路説というまったく楽観的な市場認識が加わることによって、ひとつの極めて積極的な将来展望が開かれる。すなわち彼にとって、「産業者」がいかなる制約もなしに自由に経済活動をおこなう社会においては、貧困や市場の閉塞を引き起こす分配システムの本質的欠陥の問題は存在せず、社会の悪はもっぱら生産の不十分に起因する。しかし本来生産は無限に増大しうるものであり、それが実現されないのはindustrieに敵対的な政治や社会の諸関係に問題がある。今こそindustrieをその桎梏から自由に解き放たなければならない。そうすればそこから社会と経済の発展の無際限の展望が開けていくのである。

サン・シモンはこのようなセーによって示された経済像の実現のための独自の政治的プロパガンディストとなろうとする<sup>(7)</sup>。彼は社会全体の再組織化を主張してセーが経済の政治からの分離を目指した点を批判し、むしろこうした経済像を最も完全に実現させよう政治・社会体制を創出しなければならないと主張する。つまり「産業者 les industriels」という新しい社会を担うべき階級の持つ「二つの新しい力、産業の力と科学の力」<sup>(8)</sup>を旧体制から完全に解き放ち、「人類に最大の利益をもたらすように最大限に自然を改造するために、もっぱら自然に働きかけることだけに力を注ぎ、事物に対するこの全面的な働きかけに一致協力するよう決意させるためにしか人々に力を行使しようとしなさい」こと、そしてさらに「社会全体の管理にこの計画を適用すること」<sup>(9)</sup>、すなわち前述したような言葉の本来の意味でのindustrieを組織的、計画的に全面展開させよう、そうした政治・社会体制の創出である。

すなわちセー理論における生産と消費の自然的均衡を前提とした自由主義的経済認識の枠組みを基礎にして生まれてくる生産力に対する全面的な信頼と楽観的な社会の将来像の基本形が、サン・シモンによって意識的な社会の再組織化という思想に結びつけられる。彼はこれによってセーを含むいわゆる自由主義者たちとの乖離を深めていき、自分の思想を自由主義ではない「産業主義」であるとしてこの名称を造語するのだが、いずれにせよ両者は、事物・自然の人間による征服に基づいた「生産」それ自体の自立的、自己目的的追求、その果てには人類の輝かしい未来が開かれるに違いない、そういう思想構造を共有したのである。

そしてこうした生産の未来に対する大きな期待は無論サン・シモンの弟子たちにおいてもその思想の中心に座ることになる。例えばその中心メンバーの一人であった O. ロドリグは、サン・シモン派の出発点となった『生産者』誌第 1 巻における「産業に関する一般的考察」と題する論文において彼らの期待を次のように表明する。「生産の物質的土台、人間によって、そして人間のために改造できる土台、…それは我々の住む惑星であり、その表面に生きる植物と動物をともなった地球である。…この広大な領域の開発と改良、それこそが全体として見た産業的活動の不変の目標である」。「すべての私的利益がそれによって調和されるにちがいない社会の普遍的利益は、いまやひとつの不変の土台を支えとし、実証的な仕方ですべてに定義されている。すなわち社会の、人類全体の普遍的利益とは、人類の大きな所有地とみなされる地球の、できるかぎり急速な開発と改良である」<sup>(10)</sup>。彼らの産業主義は、その無限の展望を持った生産の未来を実現するために、ここにおいて「地球の急速な開発と改良」というなんとも壮大な表現を受け取るまでになっていく。

- (1) 例えば, Démier, F., Les “économistes de la nation” contre l’ “économie-monde” du XVIII<sup>e</sup> siècle, Faccarello, G. et Steiner, Ph. (éd.), *La pensée économique pendant la Révolution française*, 1990. および津田内匠「自由貿易と保護主義の相克」(杉山忠平編『自由貿易と保護主義』, 1985), 同「フランス革命と産業主義」(『成城大学経済研究所年報』, 第 3 号, 1990) などを参照。
- (2) Say, J. -B., *Traité d'économie politique, ou simple exposition de la manière dont se forment, se distribuent et se consomment les richesses*, 2<sup>e</sup> éd, 1814.
- (3) Saint-Simon, C. H. L., *Œuvres de Claude-Henri de Saint-Simon*, éditions anthropos; t. I, (L'industrie, t. I) p. 188.
- (4) Allix, E., J. -B. Say et les origines de l'industrialisme, *Revue d'économie politique*, t. 24, 1910, pp.305-307. また James, M., Pierre-Louis Roederer, Jean-Baptiste Say, and the concept of *industrie*, *History of Political economy*, vol. 9, no. 4, 1977 参照。
- (5) 例えば, 岡田純一「インダストリーとはなにか —スミスとセーにおいて—」(同『フランス経済学史研究』, 1982), 坂本慶一『近代フランスの農業思想』, p. 19などを参照。
- (6) 例えば栗田啓子「J. -B. セイにおける市場の論理と社会の把握」(早坂編『古典派経済学研究 (I)』, 1984) 参照。
- (7) 坂本氏の表現を借りれば, 「セーの経済学の課題は, サン・シモンの思想体系の中に継承・純化される。」(坂本, 前掲書, p. 9)
- (8) Saint-Simon, C. H. L., *Œuvres...* t. II, (L'Organisateur) p. 117.
- (9) *ibid.*, t. II, (L'Organisateur) pp. 120-121.
- (10) Rodrigue, O., Considérations générales sur l'industrie, *Le Producteur, journal de l'industrie, des sciences et des beaux-arts*, t. I, 1825, pp. 99-100.

## 〔2〕 シスモンディの産業主義批判

フランスで広がろうとするこのような産業主義の夢に対していち早く冷水を浴びせようとしたのは、かつてセーの『概論』初版と時を同じくしてスミス経済学の大陸における普及を志した<sup>(1)</sup>シモンド・ドゥ・シスモンディである。この篤実な元イギリス亡命者は、すでに産業革命の中期に入り、いわゆる過渡的恐慌、都市労働者の深刻な境遇悪化などの問題を露呈しはじめていたイギリスの社会・経済の現実の態様をいち早く直視し、大陸諸国が懸命に後を追おうとしているその「産業化」の過程の中で引き起こされる社会的現実の暗い側面を、経済学者として理論的に説明し、告発しようとした<sup>(2)</sup>。彼は、「我々の時代は産業主義のそれと名付けられる」<sup>(3)</sup>と言うのだが（ここには思想としてはセーやリカードのように生産が消費を生むとして資本蓄積をそのままに推進しようとした「正統派」自由主義と、サン・シモンとその弟子たちのような後の社会主義の一面を直接準備する者たちがともに含まれる）、その「産業主義」の動きにむしろ「不安」を感じ<sup>(4)</sup>、「産業主義が追っている誤った道に注意を促すこと」<sup>(5)</sup>を自己の使命として、例えばサン・シモン派の活動の活発化や影響力の拡大の一方で産業主義の持っている危険に対して警鐘を鳴らす孤独な闘いを続けるのである。

1815年、シスモンディは、ブルボン家の復位による大革命の成果の清算やオーストリアのヨーロッパ覇権の拡大を嫌ってナポレオンの「百日天下」を公然と支持し、そのたちまちの挫折後故郷ジュネーヴに帰る。そしてヨーロッパの行く末を憂慮しつつ、まず1819年上記の意図の下に師スミスの体系の「修正」をも覚悟して『経済学新原理』を発表し、さらに1825年恐慌を挟んでの27年に同書の改訂第2版を、そして37年から38年にかけて20年代から30年代前半の雑誌論文などを集めた『経済学研究』を出版する<sup>(6)</sup>。彼が産業主義の罪惡として糾弾しようとしたのは、めざましい生産力の発展が実は恐るべき絶対的貧困の排出と裏腹であり、しかも恐慌といういわば過剰による苦しみを引き起こすという時代の逆説、つまり産業発展による急速な商品生産の増大と貧困の堆積の同時進行、諸技術の発展による物財生産の増大という通常「進歩」として観念されるまさにそのものが同時に大きな否定的現実を引き起こしつつ進行しているという事態であった。彼の言うには、確かに産業主義は生産を増大させることには大変役立ったのだが、しかし現実を直視するならば、いくら生産物が増大しても、それを享受し有益に役立てるべき人間たちは逆に困窮に陥ってしまっている。どれほどの生産の増大も、いかなるめざましい発明も、人間がそれによって生きていくということから離れてそれら自体が意義を持つわけではないのであり、産業主義者のように生産の増大をそのまま「進歩」として一面的に賛美することは新しい社会が抱える苦悩を何も説明しないのである。我々はこのような「人間の力能の発展のひとつに対する盲目的賛美」に陥ることなく、常に「それに付随する様々な社会的状況」との関係で問題を考えなければならない<sup>(7)</sup>。それが時代の逆説をいち早く読み取ろうとした彼の基本的立場であった。

シスモンディは、このように産業主義を批判して人間や社会の全体との関連を抜きに「生産」のみを取り出すことを厳しく拒否し、時代の否定面をあるがままに取り出そうとした。そしてそれによって彼は、『経済学研究』全二巻の諸論文に見られるような、新しい産業化された社会の悪と矛盾の大パノラマを提示することになる。ここではこれに関する彼の膨大な記述をひとつひとつ跡づけていくことはできないので、代わりに周知の『共産党宣言』の一節を引用しておこう。以下の一文は彼の『経済学研究』からのほぼ正確な論点抽出であると言える。

「この社会主義は、近代の生産諸関係の諸矛盾をきわめて鋭く分析した。それは、経済学者たちの偽善的な弁護論の面皮をひきはいだ。機械や分業の破壊的な作用、資本や土地所有の集積、過剰生産、恐慌、小市民や小農民の必然的な没落、プロレタリアートの貧困、生産の無政府状態、富の分配のはなはだしい不均衡、諸国民の間の産業上の絶滅戦争、古くからの風習や、従来の家族関係や、従来の国民性の解消、これらのものを反駁の余地のないまでに論証した。」（『全集』第4巻、前掲箇所）

シスモンディにとってこれはすべて産業主義の矛盾なのだが、彼によるとこうした事態を引き起こした根源にはその産業主義の側における「富」というものに対する考え方の本質的な誤りがある。つまり社会は当然富の生産を追求し自らを生かしていくものであるが、彼によると、産業主義は物財の生産のみに目を奪われて、それを富として享受すべき人間とは無関係に経済の推進原理が成立している極めて歪んだ体制を作り出してしまった。それは産業主義が、「人間自身が富に属するのか、富が人間に属するのか」という根本問題を忘れて、「富を抽象的に、そして人間や社会とは無関係に考察し、中空に消え去る土台の上にその体系を立てた」ことの帰結なのである<sup>(8)</sup>。一方シスモンディの強調するには、富、すなわちひとつの経済体制によって目標とされ作り出されるべき経済財とは、あくまでも「物の人間との間の関係の表現」<sup>(9)</sup>として、その財による人間と社会の状態の変化がいかなるものになるのかという点において判断されねばならない。つまり彼によれば、人間にとっての「富」とは生産の局面において成立するものではなく、生産物が生産の局面を離れてそれを享受する人間と直接に結びつく過程において初めて成り立つものである（後述するようにこの過程には、ある財が人間によって取得〈商品経済ならば購入〉される、つまり財の分配・取得という通常「経済的」と言われる圏内に属する次元の問題と、さらにその財の使用・消費が人間にとって有益な結果をもたらすという問題、つまりその財の使用に基づいて人間の具体的、多面的な生活が遂行される過程に属する次元の問題とが同時に含まれる）。そして本来ならばそのような人間にとっての「富」の成立の過程がすべて生産の目的たらねばならないのであり、その全過程によって生産が規制されなければならないのである。つまり彼は、産業主義者が生産の推進を自立化、自己目的化し、また経済学という科学が生産推進の科学として社会科学全体の中から分離し、特殊化しようとしていたのに対して、上記のような意味での人間にとっての真の「富」の成立の過程を生産に対する高次の普遍的規制原理として措定して、生産という部門を社会の全体システム中に抑え込もうとしたのである<sup>(10)</sup>。

- (1) Simonde de Sismondi, J. C. L., *De la richesse commerciale, ou principes d'économie politique, appliqués à la législation du commerce*, An XI (1803).
- (2) 再び坂本氏の表現を引いておくと、「セーとサン・シモンが<sup>3</sup>、生産力の増大と諸産業の全面的開花のうちに、社会発展の方向を見さだめたとすれば、シスモンディは、かれらはもちろん、総じて古典派経済学の信奉者たちが見落としたところの、輝くメダルの裏側の暗黒に鋭い観察の目を光らせる。」(坂本, 前掲書, P. 28.)
- (3) *E. E.*, t. II, p. 194.
- (4) *E. E.*, t. II, p. 150.
- (5) *E. E.*, t. II, p. 155.
- (6) ここでは要約的にしか述べられないが、シスモンディの基本思想についてはかつて一部紹介したことがあるので参照されたい。拙稿「マルクス前からの照射 ―シスモンディにおける「インダストリアルイズム」批判と「幸福」・「富」―」(『豊かさを哲学する』, 東京唯物論研究会編, 1989)。
- (7) *E. E.*, t. II, pp. 194-195.
- (8) *E. E.*, t. I, p. 3
- (9) *E. E.*, t. II, p. 165.
- (10) 彼にとっては、生産力はその時の社会の消費力を越えた時点で即有害なものに転ずる。そして彼を見るには、産業化された新しい社会は、産業主義者が当初楽観的に主張したようにその社会の消費力の拡大を容易にもたらすどころか、労働者の窮乏化と過少消費による恐慌へと必然的に進んでいく(彼は恐慌の理論家であるが<sup>4</sup>、資本の収縮から拡大の局面への転換を含む周期恐慌は知らない)。したがって彼にとってはすでに現状で生み出されている富は富としての性格を一切剥ぎ取られてしまっているものであり、彼は堂々と資本と富の「過剰」に問題を求めることができる。彼の言うには、重農主義者にせよスミスにせよ「富の形成に取り組み始めた」ばかりの18世紀の経済学者たちが、「祈りを込めて生産を促し、それが彼らには富と同じに見えた」のは確かにもっともなことだった。しかし時代の課題は変わってしまった。破壊的な競争や恐慌の発生が示しているように、「資本は今日、全ヨーロッパで過剰」となっている。彼によれば、スミスが『国富論』を書いたのは「まさしく過渡期」だったのである(*E. E.*, t. I, pp. 37-41)。

時代の基本的課題に対するこのような見方の変化が、いわゆる彼のスミス体系からの「転向」を支えている。確かにこうした見方は当時はおろかその後長く、反進歩、人類の未来への敵といった、彼に対するほとんどアレルギー的なまでの批判を引き起こさせるのだが、しかし彼自身は革命期の人らしく人間とその社会の進歩の非常に強固な唱導者であり(例えば Simonde de Sismondi, J. C. L., *Revue des efforts et des progrès des peuples dans les vingt-cinq dernières années*, *Revue encyclopédique*, t. XXV, 1825 を見よ), また自分なりに忠実なスミスの継承者を自認していた。彼の言うには、スミスはリカードとは異なる「もう一つの道」を示してくれていた。その核心は、上述の彼の富観によく現れているように、「労働、商業、富を抽象的に扱う」のではなく、常に人間や社会全体との具体的

な関係の中で把握しようとするものであり、それが彼にとっての「我々の師の方法」なのである（*E. E.*, t. I, p. 81）。そしてその方法に立ったとき、彼には、多くの人が「進歩」と称讃した19世紀初めの現実が、目指すべき本来の進歩からの逸脱、欺瞞としか考えられなかったのである。

シスモンディは今もなお無力な「ロマン派」、恐慌論史における過少消費説的誤謬の代表といったイメージでしか語られないことが多いが、しかしこの彼の「産業主義」批判によっていわゆる古典派経済学は終焉を迎え、同時に次に述べるように19世紀の経済思想における（後の言葉で言う）「資本主義」批判の系譜が始まっていくことになる。

### [3] 産業主義的社會主義の成立

富の増大が貧困を生むといった確かに逆説的なシスモンディの議論は、当初一般に受け入れられるどころかむしろ誤解と嘲笑をあび、1819年に出された『新原理』初版はまったくの不評に終わりをかけた。しかし25年にイギリスで生じ大陸に波及していった大規模な恐慌（いわゆる「初の全般的過剰生産恐慌」であり、その後10年毎に襲う周期恐慌の起点）が、その逆説に人々を振り返らせることになる。その書は急に売れ行きを伸ばし、シスモンディは「事实は私のために戦って勝利した」<sup>(1)</sup>と誇りつつその改訂版を出版する。そしてそうした中で、彼の提起した問題は、サン・シモンとその遺志（彼が死ぬのはまさにこの1825年である）を引き継ぎついで社会の再組織化のための理論的探求と実践に乗り出そうとしていた彼の弟子たちの産業主義にある種の変容を引き起こさせる。

- (1) Simonde de Sismondi, J. C. L., *Nouveaux principes d'économie politique, ou de la richesse dans ses rapports avec la population*, 2 éd., t. I, 1827, p. ii.

#### (1) サン・シモンの「新キリスト教」

「産業」なるものに内在する矛盾、それもとくに富の両極分解、生産力の増大とともに労働者の窮乏化が進行して社会の分裂を引き起こすという問題は、産業主義的ユートピアの理論的前提たる産業者階級の一体性を事実によって突き崩すものである。その中で、前述のセーの継承物を引き継ぐ Ch. コントやデュノワイエらのグループとサン・シモンの系列とは、例えばアリックスの簡潔な表現を借りれば、前者がやがて「自由主義学説を庶民階級に対するブルジョアの抵抗の学説に狭める」、いわば「自由主義学説の収縮」の道をたどるのに対し<sup>(1)</sup>、後者はそれとは異なる展開を示す。

サン・シモンがシスモンディの『新原理』を読んだか否かを明示的に確認することはできないのだが、この1820年頃から、サン・シモンの産業者階級の一体性強調には変化が現れてくる。彼は、数多くの産業者や科学者と交際して彼らの意見や意図を研究した結果、産業者にも「2つの異なる種類」、つまり「境遇の改善の願いと悪弊の除去の欲求とを結びつけている人々とその社会関係の中で悪弊を利用して利益をせしめようとひたすらもくろむ人々」、「博愛者」と「エゴイスト」の2種類がいると言い始める<sup>(2)</sup>。彼もまたこの頃から、労働者が「仕事もなく餓死に瀕している」<sup>(3)</sup>ことに気づき始め、そして「工業家たちが労働者と別の集団になっている限り、彼らが政治において労働者に理解されうる言葉を持たない限り」<sup>(4)</sup>非常に危険な事態になると考えるようになる。そして彼はシスモンディと同じく最大多数の最大幸福という功利主義的観点を労働者階級の利益に直結させてその救済を訴える論法によって<sup>(5)</sup>、「私の企ての直接の目的は、自分の腕による

労働以外には何らの生存手段も持たない階級の境遇をできるだけ改善するということです」<sup>(6)</sup>として、「最大多数者階級の社会的生存の改善を最も直接に目指しうる体制」<sup>(7)</sup>を作るための「一大精神運動」<sup>(8)</sup>の必要を主張し、結局最晩年の「新キリスト教」の提唱に至る。

このように晩年のサン・シモンは、シスモンディの書が出た20年頃からは労働者の窮乏や労資間の対立など、つまり「産業」なるものに内在する矛盾を自覚しはじめ、自己の「産業体制」を「新キリスト教」という宗教倫理で統括して社会の分裂を防ごうと考えるようになる。しかしよく言われるようにサン・シモンの場合に問題なのは、彼自身はこのように産業者内部にはらまれている矛盾を感じ取っているとはいえ、しかしセーから譲り受けた基本的な経済認識の枠組みそのものを破壊して、例えば後の社会主義の明らかなメルクマールとなるようにそれを所有一非所有を軸とした本質的な経済利害の対立に還元するような議論を展開するわけではないということである<sup>(9)</sup>。彼にとっての最大の課題はあくまでも本来利害一体たる産業者の政治的結集であり、「産業労働の指導者たち」の「利害は人民大衆のそれと本質的に同じ」<sup>(10)</sup>だと言い続ける。彼にとって、問題はあくまでも「エゴイズム」という逸脱的、一時的な精神状態に求めるしかない。そして彼は、産業者内部の分裂に対処するために2つの方策を提起することになる。すなわちそれが、まず上記のエゴイズムに対抗する「道徳的感情の最良の規範」としてのキリスト教倫理の強調＝「新キリスト教」、およびそれは「利益の問題をまったく扱わなかった」ものであるから、産業の進歩と産業体制の確立によってすべての人々にとって大きな「共通の利益」がもたらされる証拠を示すこと<sup>(11)</sup>、つまりかつてマニユエルが「ほとんどケインズ的な見解」<sup>(12)</sup>と評したような国家による大公共事業の推進である。要するに、産業内部で生じている諸矛盾に対して、本来一体たるべき産業者の間に新たな道徳的紐帯を作り出して彼らが自己のエゴイズムのみ走るのを防止して歯止めをかけようということ、そしてまたその諸矛盾を産業それ自体の強力な推進・発展によって解決（というよりも解消）しようということである<sup>(13)</sup>。産業者に自らの社会的使命と人類愛を鼓吹する新キリスト教、およびその模範的政策実践としての大公共事業の推進、晩年のサン・シモンが産業主義に付け加えたこの宗教と大公共事業という一見奇妙な取り合わせが、サン・シモン派の活動の出発点となる。

(1) Allix, E., La déformation de l'économie politique libérale après J. -B. Say : Charles Dunoyer, *Revue d'histoire des doctrines économiques et sociales*, 1911, p. 116, p. 125.

(2) Saint-Simon, C. H. L., (*Œuvres...* t. III, (Du système industriel, t. II) p. 121.

(3) *Ibid.*, t. VI, p. 456.

(4) *Ibid.*, t. IV, (Catéchisme des industriels, deuxième cahier) p. 191.

(5) シスモンディは大陸における功利主義の普及者として有名なÉ. デュモンの友人であり、フランス帝国崩壊後のジュネーブでの政治活動上の同志であった。そして彼は『新原理』の中で、政治学と経済学から成る「国政学」の基本的な目標は、「人間にその本性と両立しうる最高の幸福を保証する手段」

および「最大多数の個人をこの幸福にあずからせる手段」を追求することであるとし (Simonde de Sismondi, J. C. L., *Nouveaux principes...* t. I, 1819, p. 1.), さらに次のように述べている。「行政が、国民の他の諸階級を犠牲にしてその中の一階級の利益を目的としなければならなかったとすれば、まさに賃労働者 *journaliers* をこそ優遇しなければならない。生産価格に参与するもののうちで、彼らは最も多数者なのであり、その幸福を保証すること、それが国民の大多数を幸福にすることなのである。」 (*Ibid.*, t. I, pp. 347-348.)

(6) Saint-Simon, C. H. L., *Œuvres...* t. III, (Du système industriel, t. II) p. 81.

(7) *Ibid.*, t. III, (Du système industriel, t. II) p. 86.

(8) *Ibid.*, t. III, (Du système industriel, t. II) p. 80.

(9) これはとくに階級論を巡ってよく議論される社会思想史上のサン・シモンの二面性の問題であるが、ここではその議論には立ち入らないこととする。

(10) Saint-Simon, C. H. L., *Œuvres...* t. III, (Nouveau christianisme...) p. 180.

(11) *Ibid.*, t. IV, (Catéchisme des industriels, deuxième cahier) p. 201.

(12) Manuel, F., *The new world of Henri Saint-Simon*, 1956, p. 256 (森訳『サン・シモンの新世界』(F), p. 476). もちろん彼の「産業者」とその国家の枠組みにおいて「ケインズの」方法が自由に出てくることは別に不思議ではない。

(13) 彼にとってキリスト教の目的は、「すべてのプロレタリアにいかなる中断もなく労働を保証する社会組織を確立すること」 (Saint-Simon, C. H. L., *Œuvres...* t. V, (Quelques opinions philosophiques...) p. 86.) でさえあった。「失業根絶」の宗教、彼の言う「新キリスト教」はそういう性格を持ち、またその結局自由主義的な経済認識からしてそれでも一つの失業対策になりうると彼には思えたのである。

## (2) サン・シモン派と産業主義的社会主義の成立

しかしイギリスから波及する25-26年の恐慌をはじめとした「産業」内部の経済的矛盾の尖鋭化は、弟子たちにさらなる理論的探求を迫ることになる。バザールが言うように、彼らにとってはその出発点から、先進産業国イギリスとは「産業の物質的發展という事実だけ」では社会の無秩序状態を克服できないことの見本、「産業の物質的發展の効果のなさの著しい事例を提供している」<sup>(1)</sup> 国であり、彼らには、そこで典型的に示されているような現在の「産業」に関わる多くの矛盾の原因を説明し、さらにそれを克服して社会全体を再組織化する実践方針を提示することが必要となる。つまりサン・シモン自身には不明確であった現在の「産業」の経済的分析と経済理論の改変が彼らに課されるのである。

サン・シモン派はこの20年代の後半、その最初の機関誌である『生産者』誌を経て『サン・シモン学説解義』をまとめていく中でその課題に取り組むのだが、そこで示された諸理論には、サン・シモンに比して明確な自由主義経済学批判が現れてくる。周知のように、それは例えば自由

競争と生産の無政府性に対する明示的批判、「産業者」内部における「搾取」関係の存在、相続財産に関する所有権の再構成の必要といった後の社会主義に直結していくことになるものである<sup>(2)</sup>。彼らは、このような実際の理論的探求に際して、シスモンディが先駆的に提示した産業主義批判の経済学を自分たちなりに摂取し、積極的に利用した。例えばかつてハイエクが「競争の欠陥に関する彼らの記述のほとんどは完全にシスモンディから得ていた」<sup>(3)</sup>と評したように、彼らの自由競争批判の具体的な議論は文字通りシスモンディ理論の吸収の結果であり、また所有制度批判の議論はシスモンディがいち早く時代の悪の中心問題として提起した現在の経済システムにおける「プロレタリア」の発生とその窮乏化の問題の原因の所在を彼らなりにつきとめる努力の結果であったと言える<sup>(4)</sup>。この『解義』の成立に先立ってアンファンタンは、彼らの理論活動の出発点となった『生産者』誌に一連の経済学論文を発表し、全体として見ていわば過去の経済学史に対するサン・シモン派なりの総括を試みている。そこで彼はシスモンディに関連して概略次のように述べる。18世紀のフランス・エコノミストは自然法的均衡を前提とした根拠のない全体社会の予定調和的思想からレセ・フェール、レセ・パセという誤った公式を導いた。そしてスミス以降の経済学は逆に「社会の構成や組織に関するいかなる端緒的な思想も必要としない、価値、価格、生産といった用語の定義のような細部の諸点から本題に入っていく」<sup>(5)</sup>方法を取っておよそ全体的社会観すらも失ってしまい、結局「自由」という空疎なかけ声だけになってしまった。しかし一方アンファンタンの言うには、シスモンディは「彼が聞いた人々の著作を支配するそれよりもずっと気高い、より正確に言えば我々の時代が求めている組織化の必要により合致した傾向」を示している。つまり彼は「他の経済学者たち以上によく、自由の原理が治療できない諸悪を見」、「競争」の利点以上に欠点をよりよく評価しようとした」のであり、経済の分野において「レセ・フェール、レセ・パセの学説を捨てる」ことの必要性をいち早く示してくれたのである。アンファンタンの引用するシスモンディ自身の言葉で言えば、「経済学を『レセ・フェール、レセ・パセ』という、より単純で見かけはよりリベラルな方針に帰着させるのではなく、富の進歩を規制するために、度々社会権力の介入を要請した」こと、そこに26年のアンファンタンにとっての「シスモンディ氏の新原理の最重要点」があった<sup>(6)</sup>。

アンファンタンらサン・シモン派は、シスモンディを吸収することによって、経済システムを考えるにあたって自然法とレセ・フェールに依拠しうる時代はすでに終わったのだという主張、そして自分たちの目指す社会全体の再組織化を進めるためには、「エコノミスト派の『自然法』と『無制限の競争』の徒の『レセ・フェール』を捨てて」、「経済学が進むべき道」を新たに提示し直さなければならないという主張<sup>(7)</sup>を明確に打ち出してくる。すなわち、周知のように批判の時代—組織の時代という循環的進歩史観によって、いまや批判の時代は終わり社会はひとつの新しい原理によって再組織化されなければならないというのがサン・シモン以来の彼らの基本図式なわけだが、彼らは結局、シスモンディの理論をいわばアダプターとして経済システムとしての所有制度と自由競争体制とに焦点を当て、サン・シモンの社会の再組織化の主張を当てはめようとす

る、つまり現在の社会とは段階を異にする次代の経済体制の特徴づけをしようとするのである。

これが、シスモンディの「転向」によって開始された古典派恐慌論争が、サン・シモン派に投げ与えた反響であったと言ってもいいだろう。ここにおいてサン・シモン派は、産業主義における経済認識の基礎（つまりは資本蓄積に対する見方）を、セーの正統派自由主義経済学のそれからシスモンディのそれへと明確に移行させ、彼が「富の進歩を規制するために」提示した理論を「再組織化」のひとつのよりどころとして産業主義の中に移植する。そしてこれによって、サン・シモンには必ずしも明確ではなかった経済過程それ自体の変革とそれへの組織的介入、サン・シモン派が強調する所有制度の変革の必要や経済システムの再組織化による自由競争、生産の無政府性の克服といった後の社会主義のメルクマールとなる思想が現れるのであり、所有制度を含む経済過程それ自体の変革によって、組織化、計画化された形で「地球の開発」を推進するというサン・シモン派の社会構想（とりあえずそれを産業主義的社会主義と読んでおこう）が成立するのである<sup>(8)</sup>。

サン・シモン派は、こうして自覚すると否とに関わらず後の社会主義を直接に準備することになる。つまりかつてE. アレヴィーが評したように、「資本主義についての彼（シスモンディ）の批判的分析を生かし、それを社会主義に有利なように変えようとする」<sup>(9)</sup>、「シスモンディ主義とサン・シモン主義との総合」、つまりサン・シモンの産業主義とシスモンディの反産業主義とのある「融合」が<sup>3</sup>、近代的な社会主義思想の成立の一契機となるのである<sup>(10)</sup>。

(1) Bazard, S. -A., De la nécessité d'une nouvelle doctrine générale, *Producteur...*, t. III, 1826, pp. 548-549.

(2) *Doctrine de Saint-Simon, Exposition, première année, 1828-1829*, 1830（野地訳『サン・シモン学説解義』）。*Doctrine de Saint-Simon, Exposition, deuxième année, 1829-1830*, 1830。なお坂本慶一『フランス産業革命思想の形成』における整理がわかりやすい。

(3) Hayek, F. A., *The counter revolution of science*, 1952, p. 150（佐藤訳『科学による反革命』, p. 238）。

(4) 例えば Enfantin, P., Considérations sur la baisse progressive du loyer des objets mobiliers et immobiliers, *Le Producteur...*, t. I, 1825; De la concurrence dans les entreprises industrielles, *ibid.*, t. III, 1826 および上記 *Doctrine de Saint-Simon...* などの競争論、所有論関係の箇所を参照。なお誤解のないように付言しておくが、私はシスモンディが私的所有を否定して新しい所有形態を構想したと言っているのではない。彼は「経験が我々に教えるものとは絶対に異なる所有の状態を構想することはほとんど人間の能力を超えている」（Simonde de Sismondi, J. C. L., *Nouveaux principes...* 2 éd, t. II, p. 364）として、結局そのような試みは禁欲し、「とって代わるべき体制について考えるより前に、我々が入り込んだ体制の分析を仕上げる」（E. E., t. I, p. 71）こと、つまり産業主義体制への批判的分析者として自己を純化する道を選ぶ。この所有を巡る問題で彼が提示したのは、個人的所

有と結びついた「独立で幸福な」小生産者層の解体によって、一切の所有から切り離された「プロレタリア」という「まったく新しい存在」たる巨大な貧民の群が生まれ (E. E., t. I, p. 24), さらにこの「労働者の運命は非常にいたましいものとなり、彼らが課されている窮乏, 健康破壊, 道徳の腐敗, 子供たちの日々の犠牲は, ひとつの苦悩の複合を示す」(E. E., t. II, p. 213.) という現実が生起するそのメカニズムである。つまりかつて M. ルロワが述べたように, 「プロレタリア, すなわちこの巨大な貧民の一変種は, シスモンディによって, 労働に対応させて, 生産や経済恐慌との関係において分析され, そこから問題のまったく新しい見方が出てきた」(Leroy, M., *Histoire des idées sociales en France ; de Babeuf à Tocqueville*, 1950, p. 321) ということである。

- (5) Enfantin, P., *Considérations sur les progrès de l'économie politique, dans ses rapports avec l'organisation sociale, Le Producteur...*, t. IV, 1826, p. 388.
- (6) Enfantin, P., *Mélanges ; Nouveaux principes d'économie politique ; jours qu'ils peuvent jeter sur la crise qu'éprouve aujourd'hui l'Angleterre*, *ibid.*, t. V, 1826. pp. 95-97. アンファンタンは, シスモンディが26年に *Revue encyclopédique* 誌上に載せた『新原理』再版の予告文を受けてこの書評を書いている (この予告文は翌年出版された第2版の巻頭に収録される)。ちなみにアンファンタンのシスモンディに対する批判点は, 彼がレセ・フェールの修正を求めつつも, しかしあくまでも自由主義にとどまってその内部的批判者に自己を限定しようとした, アンファンタンから見ての不徹底さに対してである。「この優れた作家, 深遠なる政論家は, その帰結に賛同できないということで経済学においてはその原理を捨てる。だが彼はそれを政治学においては保ち続けるのである。あたかも人間精神が矛盾した2つの原理に従うことができるかのように」。しかしこれはまたサン・シモン主義者アンファンタンのシスモンディに対する批判であるとともに讃辞でもあった。「我々はシスモンディ氏に対してこのような非難を呈することができて幸せである。批判を捨てて組織化に取り組むべき時たる今日にあって, それは最大の称讃なのである」(*Ibid.*, t. V, p. 96)。このようなシスモンディへの称讃と否定の共存は後の社会主義者にも貫かれていくことになる。
- (7) Enfantin, P., *Considérations sur les progrès...*, *ibid.*, t. IV, p. 389.
- (8) 坂本氏の言葉では, 「社会主義思想史の観点からすれば, サン・シモンとサン・シモン派との間には, 古典派経済学にたいする最初の理論的批判者シスモンディが介在する」(坂本, 前掲書, p. 28) と述べられている過程の具体像を私は以上のように考えている。
- (9) Halévy, É., *L'ère des tyrannies, études sur le socialisme et la guerre*, 1938, p. 27.
- (10) アレヴィーは次のように述べている。「サン・シモン派の独自性は産業主義に経済の再組織化の計画を付け加えたことであり, 民主主義的社会主義はそこから着想を得, またシスモンディの批判からも着想を得る。シスモンディにとっては産業の集中化は破滅, 混乱, 窮乏へと通じ, サン・シモン派にとっては富, 秩序, 調和へと通じる。一方はペシミスティックな, 一方はオプティミスティックなこの2つのテーゼを融合するのは不可能とも思えた。だがこの融合こそが1830年以降おこなわれ, 民主主義的社会主義を準備するのである。…ルイ・フィリップ治下, フランス社会主義はシスモンディ主義

とサン・シモン主義との総合として現れる」(Halévy, É., *Histoire du socialisme européen*, 1948, pp. 59-60.)。アレヴィーはマルクス主義の形成を念頭においてサン・シモン派以降の七月王政期の問題として述べているが、私はこれはそれ以前にサン・シモンからサン・シモン派への流れにおいても適用できると考え、ここで彼の表現を利用した。

### (3) 産業主義的社會主義の思想構造

このようにサン・シモンの産業主義は、サン・シモン派への流れの中で反産業主義の生産規制思想との(アレヴィー流に言えば)「融合」を果たし、産業主義的社會主義への転換をおこなう。しかしこの過程は、見ての通りシスモンディにとっては産業主義批判である諸論理をその当の産業主義が吸収するという過程である(また彼が産業主義の矛盾として提示した諸問題を、産業主義的社會主義の側で、後の言葉で言う「資本主義」の矛盾として読み変えていく、あるいは分析を精緻化していく過程の始まりであるとも言えよう)。ではこの反対物どうしの融合を可能にして、産業主義の産業主義的社會主義への転換をなさしめている論理構造とは一体どのようなものなのか、それについて若干補足的に述べておこう。

前述のようにシスモンディの産業主義批判とは、財が人間にとって「富」として成立する過程、人間と物財との結びつきの全過程を踏まえて、生産に対する高次の普遍的な規制原理を求めようとする事、そしてその意味で一切の生産の自立化、自己目的化を退けるということを基本視点として、現状批判の理論を構築していくというものであった。それが無前提な生産の未来を称揚して自己目的としての生産を意図的に推進しようとする主張に対する彼の基本的アンチ・テーゼなのである。そして今考えている問題は、まさにこの経済の目的としての「富」の成立過程の構造、つまり前述のようにこの過程には、財の分配・取得のレベル、つまり生産と交換の成立をもって終わる通常「経済的」行為と呼ばれる圏内に属する問題と、その使用・消費が人間にとって有益な結果をもたらすというレベル、つまりその財の使用・消費に基づいて人間の具体的、多面的な生活が遂行される過程に属する問題が含まれるということに関わっているように思われる。

すなわち、時代が解答を求めている直接の問題、餓死するかどうかをも含めた絶対的窮乏と恐慌の問題は、その二つのレベルに即して言えば、まず第一義的にはその「取得」のレベルを巡って生じた問題、つまり生産された財がまず人間によって十分かつスムーズに分配・取得されるシステムを作らねばならないという問題だったと言えるだろう。一方当時産業主義という思想構造を生み出したのは、西欧社会が進めようとしている「産業化」という過程を全地球的に推進すれば、地上から永遠に貧困を駆逐してこの取得の問題に最終的な解決を与えられるという高らかな希望であった。当時現実味を帯びて現れたこの積極的な夢を抱く人々にとっては、貧困の解決には生産の自立的伸長の先行が不可欠であり、問題は産業主義の土台の上に立ってはじめて解決する。そして産業主義的社會主義の思想は、この時代の抱える問題に対するいわば直接の処方箋として

生まれてくる。つまりその構想にとっての課題は、上述の言い方をするならば、財の取得レベルの問題を生産の原理と結びつけるということ、言うなれば取得のレベルでの財の富としての性格の復活、生産の規制原理としてまず人間による財の十分かつスムーズな取得を据えるということにあったと言わなければならないだろう。シスモンディは同じく労働者の窮状に強い同情を寄せてその救済を訴えたのだが、しかし彼は現状における富を全否定して現下の生産力の伸長それ自体に疑問を突きつけてしまった。それは産業主義的社会主義からすれば、彼が生産力発展それ自体の持つ進歩的、社会創造的性格（後にサン・シモン主義者ペクールが「文明化作用」と呼んだ性格<sup>(1)</sup>）を理解せず、余計な所にまで足を踏み入れてしまったからにすぎない。そしてサン・シモン派は、シスモンディが「産業」の矛盾としてとらえた問題を、所有と計画の問題としていわば政策的に整理し直し、生産力のできるかぎり急速な発展という基本方針を保持しながらの所有の変革と計画化による生産の一定のコントロールに取得の問題への直接の解決策を求めたのである。

しかし彼らの構想においては分配・取得のレベルの問題を超えれば、生産はもはやそれ以上の高次の規制原理を持たずに自立化、自己目的化する。つまり財の取得の問題をクリアした等質的な勤労者の「アソシアシオン」による組織的・計画的な地球の開発というその社会の将来像において自己目的化した生産それ自体に疑問を差しはさむ要素はそこには存在しないのである<sup>(2)</sup>。

私は以上のようなものがアレヴィーが反対物同士の融合と表現した過程の論理構造であろうと思う。ここで産業主義的社会主義という言葉で述べた思想は、確かに反産業主義的要素の吸収によって成立してくるものであるが、あくまでも産業主義を土台とした思想だと言わなければならない。そして確かにこの思想構造は、本稿冒頭で引いたような批判が生まれるように、現在我々が思い浮かべる社会主義思想の極めて大きな部分を占めている。しかしこの側面のみで社会主義をまた当然マルクスをも一面化することはできない。本稿の主題に即してはもう一人語らねばならない人物がいる。それは、王政復古期にパリでサン・シモンらの産業主義プロパガンダが始まる以前に自己のユートピア像を作り上げていたブザンソンの人シャルル・フーリエである。彼は今まで登場した人物の誰とも異なる「産業」観の持ち主であった。

(1) 拙稿『ペクール・ノート—国家社会主義構想の成立過程—』、一橋大学社会科学古典資料センター Study Series No. 30, 1993, p. 13.

(2) したがって思想構造として反産業主義と産業主義的社会主義とは、その取得のレベルでの論理は一定共有しあえるのだが、それ以外ではやはり激しく対立し合う。そして以降この産業主義的社会主義の系譜は、「反生産力」の思想家シスモンディと「資本主義」の矛盾を先駆的に説明した理論家シスモンディとを切断し、前者には激しい非難を加えながら、後者には高い称讃を与え続けることになる。この点を例えばマルクスを題材にして確認しておこう。例えば次のような発言は、シスモンディの提起した「富」の矛盾と反産業主義の思想を彼が非常によく理解しつつも、あえて当面の課題として産

業主義的社會主義の立場を選択したことを端的に示している。

「彼ら（リカードらの正統派自由主義経済学者たち…引用者）は一方では労働を絶対的だとし（というのは、彼らにとっては賃労働と労働とは同義なのだからである）、他方では資本を同様に絶対的だとし、労働者の貧窮と非労働者の富とを同時に富の唯一の源泉として言い表すのだから、彼らは絶えず絶対的な諸矛盾の中で動いていながら、少しもそれを感じてはいないのである。（シスモンディは、この矛盾を感じとることによって、経済学における一時期を画している。）」（『マルクス資本論草稿集』⑦、資本論草稿集翻訳委員会訳、1982、p. 317.）

「彼（シスモンディ）の場合、根底にあるものは、実際には、資本主義社会の胎内で発展した生産諸力、すなわち富をつくりだす物質的で社会的な諸条件に、この富の取得の新しい形態が対応しなければならない、という予感であり、またブルジョア的形態はただ過渡的な矛盾に満ちたものにすぎないのであって、その中では富は常にただ対立的な存在だけを保持し、同時にどこまでもその反対物として現れる、という予感である。」（同上⑦、pp. 74-75.）

これが「富」が「対立的な存在」となっているというシスモンディの提起に対するマルクスの解釈である。彼にとっての富の矛盾はやはり取得のレベルでの現れであり、当面はそのようなものとして対処されなければならない。そして結局彼は次のように述べてシスモンディを退ける。

「リカードの感傷的な反対者（シスモンディ）が主張したように、生産はそれ自体としては目的ではないと主張しようとすれば、その人は、生産のための生産が、人間の生産力の発展、つまり自己目的としての人間自然の富の発展以外にはなにも意味しないことを忘れていたのである」。「その人たちは、こうした人間種族の能力の発展が、たとえ最初は多数の個人や人間階級全体さえも犠牲にしてみても、結局はこの敵対関係を切り抜けて個々の個人の発展と一致するということ、したがって個人のより高度な発展は個人が犠牲にされる歴史的過程を通じてのみ達成されるということ、を理解していないのである。」（同上⑥、1981、pp. 160-161.）

たとえ「人間階級全体さえも」犠牲にされる局面があろうとも、シスモンディのように生産の未来に対する希望を捨ててはいけない、マルクスはそう主張する。マルクスにとっては、シスモンディがその入り口に立って阻もうとした新しい「産業」の時代、つまりは「資本主義」という名の生産の自己目的化システムを歴史的に経過すること、いかなる犠牲を払おうともその盲目的な生産追求システムをくぐっていくことが歴史の進歩の道なのである。そして彼は、「産業」という一実体を「生産力」・「生産関係」という対概念で概念的二分法にして歴史の発展段階説を構成し、産業主義の積極的な夢を確保する。

## [4] フーリエと「産業」

前述のセーやサン・シモンの産業主義が、要するにイギリス産業と肩を並べるために金融資本を軸とした上からの工業化と市場圏の拡大によって経済の高度成長を図るイデオロギーだったのに対し、フーリエの構想は性格も方向性もそれとは非常に異なっている。周知のように、彼の有名なファランステールという社会構想は、要するに工業の分化・自立を否定した農業を中心的労働とする自給性の高い集団作業場の集合体であるが、そこには常に、自由で調和的な小規模協同体への志向、連邦主義・分権化といった産業主義者とは逆のベクトルが働いている。

フーリエの構想が実際に社会的反響を得、支持者を獲得していくのは王政復古期に入った1822年の『家事と農業のアソシエーション概論』によるのだが、その基本思想の形成は、より遡った1799年（彼が有名な「4つのリンゴ」のエピソードを引いて「私の情念化系列の理論の萌芽の発見」の年だとしている時点）から1808年（『四運動の理論』の出版の年）にかけて、つまり執政政府から帝政へかけての時期、要するにナポレオン時代の前半期である。この時期に彼がその社会観・経済観を最も早い時点で表明している文献たる1803年の「法務大臣宛手紙」において、すでに次の諸点を確認することができる。つまり、1）自分の発見した「調和社会」において目指されるのは「貧困の根絶」と「段階的変容 *métamorphose graduée*」（つまり平等の実現ではなく階層秩序の全体としての底上げ）とによる政治的混乱の解消であること、2）そしてそのためには、「我々のそれ以上に生産的な産業秩序」、「文明秩序がよく耕作された国土にもたらしうるその少なくとも3倍の生産物をもたらす」秩序が必要であること、3）しかるに既存の経済理論はこれらの目標には無力であり、それはイギリス社会の現状がよく証明している、といった主張である<sup>(1)</sup>。

注意すべきは、彼はこの1803年にセーやシモンディがスミス体系の本格的な紹介に努め始めるその同時期に、すでに自分はイギリス型の産業発展とは異なる生産力上昇と分配の公正の確保の道を発見したと自称しているということであろう。結論的に言って彼は、新しい産業の移植云々以前に、現状における所有の分散状態（*morcellement*、経営・労働の個人化）と、商業つまり市場関係の流通機構への介入とが生産を阻害している要因だと捉え、その裏返しとしての所有・経営が社会化され社会的分業が克服された生産者の直接的結合体に必要な生産力発展の道筋を定めるのだが、それは彼がこの後、上記の『四運動の理論』の執筆や『概論』の出版準備の中でほぼ1810年代までにここに言う経済的な課題が具体的にいかにして実現されるのかを構想として作り上げる中で提示されてくる。以下具体的に見ていくように、彼は同時期にセーやサン・シモンらが始める産業主義のプロパガンダとは無縁な形で、つまりフランスにおける産業主義という思想が王政復古期において強力なイデオロギーとして定着する直前ないしそれとは並行的に自己の未来社会像の基礎を形成する、少々図式的であるが、そのようなイメージで捉えることが可能であるように思う。

こういう事情の下、彼は、「産業」と生産力、スミスの自由主義経済学に対する認識などについて、産業主義者とは別の理解をし、別の理念を掲げることになった。そしてその故に彼は、サン・シモンの系列とは別の性質の要素を後の社会主義への遺産として残すのである。

- (1) Pellarin, Ch., *Lettre de Fourier au Grand Juge (4 nivôse an XII)*, 1874. 彼は次のように述べている。économiquesと呼ばれる「哲学理論」の一派は、「民衆のためになるいかなる見解も持っておらず、個人の境遇に配慮しないまま一国を富ませることしか考えておりません。その証拠に、諸経済理論は『イギリス人』を富ませることなく大いに『イギリス』を富ませたのであり、だからロンドン一市だけで15万人の極貧者、売春婦、泥棒、乞食、無頼漢が見られ、スコットランドでは労働者の間にぞっとするような貧困がはびこっているのです。しかしながらこれが民衆の不幸を緩和すると称する現代の諸体系の結果なのです。」(Ibid., pp. 20-21)

## (1) 「文明」・「産業」・「商業」

まず彼の基本的な経済観を明らかにするために、「文明」、「産業」、「商業」といった基本概念、およびそれらに基づいて構成される彼の歴史観をできるだけ簡単に見ておこう。

彼によると、人類社会は未開一家父長制―野蛮―文明へと進んでいき、さらにその「文明」における「大産業 grande industrie, 高度科学, 芸術」を必要条件として「調和社会」へ移行していくという<sup>(1)</sup>。これはこの部分だけ取り出すと産業主義者がフランスへの輸入を主張した近代的大工業（これは単に機械を使うか否かといった問題ではなく、国民経済の全体構成に関わる）を彼が受容・前提していたかのように見かねないが、しかしその内実は非常に異なっている。

まず彼の言う調和社会の必要条件としての「産業」、「大産業」であるが、彼によると、「人間が大産業を創出しはじめるのは第4期社会、野蛮においてである」<sup>(2)</sup>とされており、彼は野蛮から文明（これにはギリシャ・ローマから現代まで含まれる）まで共通する要素として自己の「産業」を考えている。つまり産業主義者の強調点とは異なって、彼の考える「産業」とは未開から野蛮への移行を画する農耕及びそれに付随する手工業的なものが連続的に拡大してきた存在ととらえられている<sup>(3)</sup>。そして野蛮から文明への移行を画するのは、産業云々といった生産力的要素ではない。それは彼の場合は結局恋愛制度に求められる<sup>(4)</sup>。要するに彼の言う同時代の文明とは、野蛮時代に発生した「産業」が量的に拡大し、それに一夫一婦制が付加したものだということになる<sup>(5)</sup>。

さらにこの「文明」に達して後、その内部でも上昇・下降各々2局面づつを経て<sup>(6)</sup>第6期の「保証主義」という段階へ入るのだが、その過程は要約すれば次のようなものである。文明においては一夫一婦制の採用の下でこの慣習の結果だとされる芸術と科学の才能が芽生える。そして次に奴隷制から農奴制への移行によって直接的生産者が土地を掌握し、彼の言う「産業」が発展する（ここまでが上昇期）。しかし航海術の進歩と植民地貿易の拡大を契機として商業が成長して、そ

れが「産業」を圧迫し（その最たるものが彼が度々怒りを込めて言及する「島国独占」つまりイギリスによる海上交易の掌握による大陸諸国の圧迫）、また人心を腐敗させて、結局少数の大商人の支配する腐敗とエゴイズムに満ちた社会に墮落させてしまう（下降期）<sup>(7)</sup>。そこで次の段階としては、その産業を抑圧して、真実が支配する「新しい交換様式」を打ち立てて文明を脱却する。

彼はこのように、野蛮時代に発生して拡大してきた自分の言う「産業」が、産業に支配、従属させられる点をもって文明を二分する「革命」とし、それ以降社会は衰退への道をたどっていると考えている。よく言われるように、当然このような歴史観にはイギリスで進行した産業革命の歴史的意義は入る余地はないと言わざるえない<sup>(8)</sup>。そしてここから帰結するのは、まず第1には、こうした産業観の枠組ならば、生産力上昇に課せられる課題とは、要するに富者の取り分を除いても貧困層全体に食糧とその他の必需品を行き渡らせうという非常に限定されたもので済むということ、そして第2には、彼の言う「産業」の最大の掠取・攪乱者である「商業」の徹底的な排斥である。

(1) Fourier, Ch., *Œuvres...*, t. VI, p. 9.

(2) *Ibid.*, t. I, p. 68.

(3) 「そこ（第4期社会）において、新しい力、『大農工業産業 la grande industrie agricole et manufacturière』が獲得され、それが第5、6、7期の上昇期を通して増大し、ついには人類に混沌から調和社会へと乗り越える手段を与える」（*Ibid.*, t. I, p. 36）。また *Ibid.*, t. II, (Avant-propos et plan de l'ouvrage) p. 75も参照。

(4) 「各期間には、『機構の軸』を成し、その有無が期間の変化を決めるひとつの性格がある。この性格は常に愛から引き出される。第4期においては、それは『女性の絶対的隷従』である。第5期においては、それは『単婚 le mariage exclusif』と『妻の市民的自由』である。…もし野蛮人たちが単婚を採用したならば、彼らはこの変革だけでたちまちに文明人となるであろう。」（*Ibid.*, t. I, p. 89）

(5) 「文明を、それが存在していない地球の8分の7に生じさせるためには、未開人に産業を採用するように、野蛮人に、女性へ、彼女たちがギリシャ人において享受していた市民権を授けるように決意させる手段が必要であろう。」（*Ibid.*, t. XII, p. 628）

(6) *Ibid.*, t. I, p. 218の「文明運動の進行表」参照。また *Ibid.*, t. III, p. 207にも同様の表がある。

(7) 例えば次のように言われている。「封建制へと移行することによって、奴隷は個人的隷属から集団的すなわち結合的隷属へと移行する。…封建奴隷すなわち封土に結びつけられた農奴は決して消滅することのない同職集団 corporation を形成する。それが得る特権は年々受け継がれていき、地域全体に永遠に利益をもたらす」（*Ibid.*, t. XII, p. 635）。ところが「植民地独占から生じた商業政治の影響によって」（*Ibid.*, t. I, p. 220）、文明はその「絶頂」を越えて下降期の第3局面へと入ることになる。「このような事物の秩序は政治の進行を全体的に変化させ、第1および第2局面では直接的で農業的だったその体系は、第3局面では間接的、重商的になる。それ以来すべての社会関係は大なり小なりこ

の革命の影響を受け続け、文明全体がこの新しい色彩を帯びる」(Ibid., t. XII, p. 639)。

- (8) 坂本氏はフーリエの農業思想の現実性を強調するために、彼のイギリスの産業革命への態度について明言を避けているが(例えば坂本、前掲書、p. 143, p. 240など)、ここに氏の解釈の難点が現れているように思われる。氏の見解は、「フーリエ思想をフランス産業革命の一環をになう『農業革命思想』とみる」(同上書、p. 241)としてイギリス経済史の発展図式を当てはめ、産業革命はサン・シモンが、農業革命はフーリエが代表し、結局両者あい携えてフランスの近代化に貢献しようとしたといった構図を作るのだが、それでは国民経済の発展方向を巡る両派の相克がまったく理解できなくなってしまうだろう。フーリエが大農経営の合理性を求めたのは確かだが、しかし氏自身も認めるように、それとイギリスの資本主義形成を支えた「農業革命」という歴史過程とは、おそらく純粋に農業技術的な面を除けば別に関係はない。フーリエを地主イデオロギーたる重農主義の枠に押し込むのも、またこのように産業構造近代化の旗手にして意義づけようとするのも、同じく偏頗な像を作る点ではかわりはないように思う。

## (2) 商業批判と経済学史の転倒

先に第2の点から見ていこう。かつてR. ガロディが「フーリエの著作はすべて商業の害悪に対するながい告発状である」<sup>(1)</sup>と述べたように、彼は生涯を通じて商業と商人とにほとんどとめどもないような激しい悪罵を投げつけている<sup>(2)</sup>。彼にとっては商業とは、「不正取引と投機によって、生産的産業を育成するのに当てられる資本を吸収し、そしてまさにこの産業を妨害することにそれを用いる」<sup>(3)</sup>もの、つまりは生産部門から資本と人手をそらして生産を阻害し、また種々の不正行為によって流通機構に無駄、非効率を生じさせるものにすぎなかった。

彼が実際に商業の害悪として述べている問題そのものは、前述のような彼の言う「産業」といわれる前期的商人資本(彼自身その一員だった)の対立という枠内で理解しようのだが、興味深いのは、彼にとってはそれは、イギリス的な自由競争の理論、スミスの自由主義経済学の結果だと考えられており、そして彼は、サン・シモン派とはまた違った理由でレセ・フェールの理論に非難を浴びせ、結局極端に反市場的な生産協同体の理想化に行き着くということである。

この点は、いわゆる彼の重農主義へのシンパシー、ケネーとスミスに対する評価の違いに如実に現れる。以下は坂本氏も一部引いておられるが、特徴的な部分なので引用しておこう。

「(航海術と植民地貿易つまり文明の「絶頂」以降の重商主義的風潮に対して)フランスで道理のある学派 *secte raisonnable* が芽生えていた。産業機構全体を農業の便宜に服させようとしたケネー学派である。ケネーは製造業のことはほとんど考慮しなかったが、それは商業とはよく区別する必要のあるものである。それは商業との複合に陥っている。それは混合的な職種であり、それに対しては生産的部分は保護し、商業的部分は抑圧しなければならない。ケネーはこの区別を無視し、およそ分類学のように極端な見方をとっていた。それでもなお彼は善の道にいたのだ。

なぜなら彼は商業を農業に従属させようとしていたからである。彼の学説は挫折した。イギリス国教徒たち Anglicans のそれが優勢になり、ケネーの教義は発展させようとも改良しようともしないまま忘れられた」<sup>(4)</sup>。「目を引いて奇妙なのは、問題のばかげた教義が、あらゆる党派を、それもその原理はこの商業の放縱に対立していたフランス学派をも併合したということである。なぜなら、もし商業がケネーの言うように寄生的役割をしか演じないのならば、もし農業が社会の財産の唯一の源泉であるのならば、その結果として、商業の利益と強奪とが制限され、それがその事務員である農業に対する保証を、それに強制しなければならないからである」<sup>(5)</sup>。「イギリス人スミスは、数多くの理由をあげて小麦商業を完全な自由になんぞ任せなければならないと証明する。しかしながら、少しでも商業の謀略を知っているものならば誰でも、もし小麦の買い占め人が民衆の怒りと略奪を恐れていなかったならば、彼らが極めて穀物の豊富な国で指定の期日に飢餓を引き起こすことができるのは承知しているのだ」<sup>(6)</sup>。

問題は、フーリエが製造業を富の源泉として認めているから重農主義より進歩している云々といったことではない。ここでの彼の主たる観点は生産活動全体の推進にとって商業の有効性を認めるか否かということに置かれているのだが、問題はこのように彼が製造業をある程度（つまり彼の「産業」に含まれる範囲で）富の源泉として認めつつも、重商主義批判としては（一般に富の源泉を生産活動に見るという意味では）むしろ素朴な段階であったケネーの方を積極的に評価し、彼からスミスへの流れをもって経済学の決定的後退だとみなしているということである。フーリエの考えるスミスは、愚かにも自由競争が「まだ弱すぎると信じて」<sup>(7)</sup>、「商人のなすに任せよ *laisser faire les marchands*」という馬鹿げたことを唱え、また教会への国庫助成の廃止を主張してカトリックに打撃を与えようとするイギリス国教徒の「陰謀団」にすぎない<sup>(8)</sup>。そしてこのような連中がフランスに吹き込んだ「自由競争」の理論、商人の自由の理論に反駁し、「『自由競争』と呼ばれる現在の様式よりも不備の少ない交換様式」<sup>(9)</sup>、「社会体にとってこれほど有害でも下劣でもない」<sup>(10)</sup>新しい交換様式に置き換えることが彼の課題となる。

こういう認識には、確かに通常の経済史、経済学史の理解からすればある認識の転倒（イギリスから入ってきた理論を何とも性急にフランスの現実とつき合わせてしまうことによって生じた転倒）があると言わざるえないのだが、いずれにせよ彼は、自己の課題、すなわち前期的商人資本の駆逐による自分の言う「産業」の確立という課題を、スミス批判を通じて展開するという論理構造を抱え込む。そしてその延長上に彼のアソシエシオンの経済像が展望されていくのである。

(1) Garaudy, R., *Les sources françaises du socialisme scientifique*, 1949, p. 101（平田訳『近代フランス社会思想史』, p. 153）。

(2) ここでは一例だけあげておこう。「商業論争が始まってからまだほとんど半世紀にしかならないが、その著者たちは商業機構が常識とは反対に組織されていることに気づかぬまま、すでに幾千もの書をものした。それ（商業機構）は社会体を、商人という寄生的で不生産的な代理人の階級に従属させる。

すべての必要不可欠な階級、つまり地主、農民、製造業者、また政府すらも、自分たちの配下、その解任可能な責任委託代理人であるはずの一付随階級、商人によって牛耳られており、それが流通のすべての圏域を思うがままに操り阻害しているのだ。」(Fourier, Ch., *Œuvres...* t. I, p. 222)

(3) *Ibid.*, t. X, (Publication des manuscrits... vol. I) p. 253.

(4) *Ibid.*, t. XI, (Publication des manuscrits... vol. III) p. 158.

(5) *Ibid.*, t. XI, (Publication des manuscrits... vol. III) p. 87.

(6) *Ibid.*, t. XI, (Publication des manuscrits... vol. III) p. 91. なおこの“豊富の中の貧困”という言葉は、本稿で後にエンゲルスのフーリエ論に言及するときに再び出てくるので記憶しておいていただきたい。

(7) *Ibid.*, t. X, (Publication des manuscrits... vol. I) p. 266.

(8) *Ibid.*, t. XI, (Publication des manuscrits... vol. III) p. 84.

(9) *Ibid.*, t. I, p. 223.

(10) *Ibid.*, t. I, p. 253.

### (3) 反市場型ユートピアの導出

彼の商業観とそれへの対案の内容をもう少し詳しく見ておこう。彼は、三十いくつかの商業の悪しき性格の内の主要なものとして、1)「直接的価値評価 l'évaluation directe」、2)「中間所有 la propriété intermédiaire」、3)「野放しの不正行為 la fraude impunie」の3つを挙げており<sup>(1)</sup>、要するにこの3点を克服する手段を構想しようというのが彼の大まかな方向性だと言っていいだろう。

まず1)についてはこう述べている。「この自由競争と呼ばれる秩序の第1の悪は、各自に自分の商品の評価の権利を任せ、生産者すなわち商品所持者の先入観に対して、同じく不公正な購入者の先入観をしか対置しないということである」。彼にとっては商品交換というものは一貫してこのようなものとししか考えられていない。それは「漠然と自由な交換と定義されているが、単に自由だけで最善ではない交換様式」であり、「販売者が罰せられることなく不正をし、仲介的裁定なしに自分で利得を決定できる交換様式」にすぎなかった<sup>(2)</sup>。彼にとっては、前述のスミスをはじめとするイギリスの陰謀団やそれにだまされている者たちのように、このような商品交換を基礎とする「商業と自由とをもって」社会の調和ができるというのはまったくの錯乱であり<sup>(3)</sup>、自己利益を争って不正と腐敗をはびこらせるこうした個々の売買行為をまずもって廃止しなければならなかった。そしてこれに対して彼は、「仲介的価値評価 l'évaluation intermédiaire」、つまり「評価対象に関する一切の利害関係から自由で、売却に付される商品の比較評価を決定して書面で伝達するのに十分な知見、知識、情報を備えた仲介者」の必要を主張する。すなわち彼は、自由な個別的売買行為を通じて全体として貫徹し、適切な市場価格の決定と社会的分業のコントロール

をおこなう内的法則たる価値法則への依拠を非常に道徳的な理由で（あるいはそれを理解せずに）拒否し、社会的に妥当しうる商品の交換価値の決定を一手に引き受けて客観的に遂行しうる人為的機関を設置しようとする。

次に2)についてはこう述べる。「商業メカニズムの第2の悪は『中間所有』であり、それを直接所有に変身させる必要がある。…産業秩序は生産、消費、分配の3つの機能からなる。もし第3の分配機能すなわち商業が自由であれば、それは他の2つを従属させ横暴に振る舞うことになってしまう。したがって社会の調和は分配機能を生産と消費の2つの機能に従属させる [ ]（原文空白…引用者）の上にしか基づきえない」。つまり彼の言うには、現状では、分配機能を担う商人が流通過程に介在して生産と消費を支配してしまっている。したがって上記のような価値決定機構の下で「都市民と農民との直接交換」ができるようにすればいいのだが、生産地と消費地の距離がある場合は何らかの仲介者がどうしても必要になる。したがって商人が商品の中間的所有者となって独自の利害を持つことになる形態は廃止し、単に生産者によって物流を委託されるだけの機関に置き換えようというわけである。そしてこうした機関が設置されれば、当然3)のような不正、腐敗の心配はなくなる。商業つまり流通機構は「耕作と製造への奉仕に配置された義勇軍」<sup>(4)</sup>と化し、物流はただの一通の回状によって右から左へと何の不正もなしに行われるようになる。つまり「いかなる不正行為の心配もなしに、極めて大切な買い物を一人の子供に託せるような」、そういう秩序ができるのである。

そして結局彼はこうした方向の上で、自己のユートピアに、「先行的価値評価 *évaluation antérieure*」<sup>(5)</sup>、すなわちいかなる市場機構も必要とせずに財の交換価値を前もって客観的に測定できる社会的能力を想定することになる。つまり彼の商業批判は、一切の市場機構を追放して、価格メカニズムによる生産調節というその持つ役割のすべてを人為的にコントロールできる状態の理想化にたどり着くわけである<sup>(5)</sup>。

(1) Fourier, Ch., (*Œuvres...*, t. XI, (Publication des manuscrits... vol. III) pp. 197-201. 以下の指示のない引用はこの部分からのものである。

(2) *Ibid.*, t. XI, (Publication des manuscrits... vol. III) p. 16.

(3) *Ibid.*, t. III, p. 242.

(4) *Ibid.*, t. X, (Publication des manuscrits... vol. I) p. 251.

(5) この際の価値基準が何になるかは明確ではないが、おそらく例のように人間にとっての「引力」の含有量になるのだろう。これはつまり人間にとっての本源的な欲求の度合いということだから、言うなれば物財の使用価値が本来の価値基準として復位された状態とも言えるかもしれない。

#### (4) フーリエの産業主義批判 ―イギリス型社会発展へのアンチ・テーゼ

フーリエが参照している18世紀の「商業論争」において反モラリストの側の支柱とされるスミスやヒューム、および王政復古期の産業主義者を含めたフランスにおけるその輸入者たちのように産業革命と工業拡大の志向を持つ人々にとっては、フーリエのように商人の悪徳を云々することに独自の意味はない。むしろスミスの表現を借りれば、「社会に貢献するつもりなど少しもない」この連中が、いかに資本を浪費せず生産活動に合理的に投下し、結果として農村にも「秩序と善政」、「個人の自由と安全」を広げていくか<sup>(1)</sup>、が強調されなければならない。そして結局スミスにとっては、商人とその活動とは「見えざる手」の中の一与件として前提すれば十分なのであり、それを内包した市場システムを軸とする生産力発展とその経済調節力、社会形成力への信頼が、彼らの政治経済学、市民社会の秩序の学の疑う必要のない支えとして措定されることになる。マルクスの表現を借りれば、産業革命から資本主義の確立への道は、商人資本の支配から脱却して、商業を「市場の不断の拡張を生活条件とする工業生産の召使い」<sup>(2)</sup>として包摂した産業資本の支配への移行の道である。それはつまり旧い小生産を強制的に壊滅させての賃労働者とそれを包む全社会的な商品＝市場関係の創出、そして生産がその全般化した市場を前提に個別資本間の不断の競争をインセンティブとして歯止めなしにおこなわれていくシステムの形成の道であった。確かにそれは、シスモンディが一早く告発したように、当初産業主義者が手放しに礼賛したのとは異なっており、いわゆる「血と汚物をしたたせながら」の道となったが、いずれにせよ産業主義のヴァリエーションが、好むと好まざるとに関わらずその歴史の現実の発展過程を前提として思考しようとしているのに対し、フーリエは（この点ではシスモンディと同じく）、フランスがそのような産業革命と資本主義の育成の道に入り込むのを入り口で拒み、それとは認識の根底の所から分岐した別の道を求めようとしているのである。

両者のこうした関係は、前述のようにその生産力に対する認識の違いにはっきりと現れる。フーリエは、「工業労働の無際限の増大が富の増大である」と主張する「文明の経済学者」を批判して工業生産の量的拡大の意義を否定し<sup>(3)</sup>、あくまでも工業は「農業システムの付随物と補完物、その便宜に従属した機能」<sup>(4)</sup>以上であってはならないと主張する。彼にとってイギリスのような産業発展は、『大工場 grandes fabriques』と呼ばれる産業的徒刑場<sup>(5)</sup>によって無益な工業生産の過剰を作り出しているに過ぎない。そして極端な言い方をすれば、彼にとって調和社会への移行のために必要な「産業」は産業革命以前の地点ですでに過剰であるとさえ言われることになる<sup>(6)</sup>。

彼の考える社会的に必要な生産力発展は、農業組織の改革によってたやすく実現されうるものである。ファランステールという農場の生産に限って考えてしまえば、集団化による規模拡大と経営の合理化を行い、同時に構成員全員を株式所有者として自作農の勤労心を喚起し、さらに労働が快楽となって労働時間、投下労働量が増えれば生産が増大すると考えるのはもっともなこ

とである（これは彼の性愛論や宇宙生成論がいかに常識からかけ離れたものであろうとも七月王政下でフーリエ派が拡大する理由である）<sup>(7)</sup>。彼は『概論』の宣伝パンフの中でさかんに次のように強調する。現在の「文明の収入は50億フランに限られている。しかしもしアソシアシオンが1824年5月に試験され、7月に証明されたならば、それは1825年には創設されよう。この第1年度からすでにフランスは100億フランを、そして1826年には150億フランを生産し、その力の発揮は完全なものとなろう」<sup>(8)</sup>。彼にとって社会的に必要な生産力上昇は自分の構想をもってすればたちどころにその目的を達成してしまう。そして彼は、産業主義のような無限の経済成長イデオロギーに依拠せずともたやすく労働者の窮乏を救済し分配の公正化を実現することができると考える。そして1829年、『産業的新世界』で自覚的に王政復古期の産業主義との対決をしなければならなくなったとき、彼は次のようにそれを堂々と「産業の濫用」と断じ、その「一掃」を主張するのである。

「産業主義は我々の科学的妄想のうちで最も最近のものである。それは比例的分配についてのいかなる方法もなしに、生産者すなわち賃労働者にとっての富の増大にあずかるいかなる保証もなしに、雑然と生産する偏執である。…重要なことは序文の段階から産業主義の幻想を、すなわち産業の濫用を一掃することである」<sup>(9)</sup>。

(1) 『国富論』、大河内一男監訳（中央公論社）、p. 639, p. 650.

(2) 『資本論』、『全集』第25a巻、p. 419.

(3) Fourier, Ch., *Œuvres...* t. IV, pp. 209-210. その理由は、工業製品（つまり衣服と家具）は調和社会にあっては驚くべき耐久性を持ったものとなり、「多様」ではあっても「最小の消費」へと向かうということ、そしてまた「もし工業製品の過剰消費が人々を農業の快適な労働時間から外してしまうならば」調和社会の均衡が崩れてしまうということ、つまりその労働は農業労働に比して人間にとっての魅力が少なく、そもそも拡大されてはならないということであった。総じてフーリエの考える望ましい消費動向はこのように少量、多様、高品質へと向かう。

(4) *Ibid.*, t. VI, p. 140.

(5) *Ibid.*, t. VI, p. 436.

(6) 「我々の知識と産業との過剰は、極めて健康的な食物でも度外れに食べると気持ちが悪くなるように、我々にとって有害なものとなった。我々には第6期のテコが備わっているのに、『文明にとどまる』というのは度を過ぎることなのだ。…我々は18世紀の中頃からこの産業の成熟に達していたのである。」(*Ibid.*, t. III, p. 209)

(7) この彼の農業思想の合理的な面については、坂本、前提書。

(8) Fourier, Ch., *Œuvres...* t. II, p. xxxvii. また『産業的新世界』ではさらに誇張されて、初年度から4倍になるとする (*Ibid.*, t. VI, p. 1)。

(9) *Ibid.*, t. VI, pp. 28-29.

## (5) フーリエの思想と現代

以上私はフーリエの思想の産業主義との相違の面を強調してきたのだが<sup>(1)</sup>、しかしそれはフーリエの思想が当時も今も時代遅れの無力なものだと言いたいからではない。当時としては、フーリエ自身の考えとその構想の現実的な面に賭けようとしたフーリエ派の強調点は当然異なっているし、また現にフーリエの思想は、急速な産業化の推進の中でむしろその被害を被る小ブルジョア層を中心に多くの人々をとらえる。それは確かに彼らに富と安定を与えようとする思想なのである<sup>(1)</sup>。

一方現時点においては私は次の2つの点を指摘しておきたい。ひとつは、例えば半世紀後にエンゲルスがしたように、この王政復古期における（あるいは18世紀以来の脈絡を持った）産業主義とそれへの対抗という国民経済の発展方向を巡る相克を抜きにして彼の思想をそのまま「資本主義」批判に還元してしまうことの危険性、そしてもうひとつは、それが産業主義批判であったがゆえに持ちえた、思想としての強靱さである。

エンゲルスは、フーリエが25年から26年にかけての恐慌を「多血症的」と呼び、また「文明においては貧困は過剰そのものから生ずる」といった部分を抜き出しフーリエの偉大な弁証法と礼賛したのだが<sup>(2)</sup>、しかしフーリエの理解は、シスモンディのように社会の消費力と生産力の矛盾として、つまり資本主義に固有の過剰生産と富の両極分解を理解した上での批判ではなく、どこまでも悪徳商人による投機恐慌、流通機構での攪乱なのであり、彼はセーとシスモンディの論争に自分の年来の商業批判を重ね合わせているにすぎなかった<sup>(3)</sup>。彼の目指しているのは、産業革命を経て確立した資本主義社会を一旦前提した上での乗り越えてではなく、やはり商業に代わる「新しい交換様式」をもった自分の考える「産業」の確立である。つまり彼はイギリス型社会発展とその理論装置とにまったく依拠しない形でのアソシアシオン形成の方向付けをおこなったのである。もしこの構造をはっきりと認識しておかないならば、そこからは、フーリエ的アソシアシオンつまり所有の社会化された集団農場の集合体のようなものをそのまま資本主義よりも高度な社会構成体であるとするような強弁が生まれるだろう。それは歴史の課題に対する極めて不幸な理論的錯誤の温床となったのではないだろうか<sup>(4)</sup>。

第2の点については、まず次のマルクスの周知の一節を思い出していただきたい。「自由の国は、窮乏や外的な合目的性に迫られて労働するということがなくなったときに、はじめて始まるのである。つまり、それは、当然のこととして、本来の物質的生産の領域のかたにあるのである。未開人は、自分の欲望を充たすために、自分の生活を維持し、再生産するために、自然と格闘しなければならないが、同じように文明人もそうしなければならないのであり、しかもどんな社会形態のなかでも、考えられるかぎりのどんな生産様式のもとでも、そうしなければならないのである。彼の発達につれて、この自然必然性の国は拡大される。というのは、欲望が拡大されるか

らである。しかしまた同時に、この欲望を充たす生産力も拡大される」<sup>(5)</sup>。私にはフーリエは産業革命と産業主義というものがこの欲望と生産力の拡大を、「自然と格闘」しなければならない限界の拡大を高唱する直前に位置したように思える。彼のユートピアにおいては、産業主義者が無限の膨張運動のように描いた生産の量的拡大はいとも簡単にその必要量に届いてしまい、彼にとっての社会における「産業」つまり経済という領域は、この「自然必然性の国」において強いられる諸目的をたやすく乗り越え、自然との一致、人間の情念との直接の融合へと入っていく<sup>(6)</sup>。

彼のユートピアは、産業主義が解決を目指した問題が消え去った地点で独自のはばたきを始める<sup>(7)</sup>。産業主義のような無秩序な自然からの略奪と浪費は終りをづけ、エネルギー消費は減少して「森林、資源、風土の回復」がなされる<sup>(8)</sup>。一方人間はもはや飢えることはおろか分業へ縛り付けられることすらなく、一切の経済的制約から解き放たれて、朝には狩りをし昼には釣りをするように社会の種々の活動を自由に移っていくことができる。個と全体の矛盾のすべてが解決され、人間、社会、自然の完全な調和にもとづく真の「自由の国」がそこに現れる。この何とも鮮烈で息を呑むような美しさはどうだろうか。それは産業主義というある歴史的イデオロギーには解消しえない、人間の普遍性に直接根ざす豊かな理念の泉のようである。そしてその思想は、フーリエ派のファランステール建設運動それ自体に賛成するか否かを問わず、後の社会主義に、人間の真の自由と解放のための思想たることを自称させる多くの要素を注ぎ込むことになるのである。

(1) 例えば前掲の拙稿『ベクル・ノート ―国家社会主義構想の成立過程―』における、ベクルがフーリエ主義にかけた期待を参照されたい。

(2) 『空想から科学への社会主義の発展』、『全集』第19巻、p. 194. または『反デューリング論』、『全集』第20巻、p. 270, p. 285などを参照。

(3) 彼は確かに労働者の窮乏化を告発し恐慌を非難するのだが、しかし彼は「商業の36の罪」と称してそれらを含むありとあらゆる経済的矛盾を商業という現在の交換方式のせいにしようとする (Fourier, Ch., *Œuvres...* t. III, p. 219)。例えば彼は、労働者の貧窮や恐慌の発生を次のように説明する。

「『賃金低下』、労働者の賃金を可能な限り縮小し、そしてその極度の窮乏の上に、労働者の貧困化に比例して繁栄する製造業の成功を作り出すという慣習。ヨーロッパでもインドや中国でも、この名高い製造業の職工たち以上に貧しい者があるか！ 文明のメカニズムの奇妙な作用、産業が繁栄するためには、それを実行する労働者が極度の貧困になることが必要なのだ。…賃金低下は、生産物の価格と同じように労働の価格を値切り、仲介なしに決定する慣習を打ち立てる恣意的価値評価 *l'évaluation arbitraire* から生ずるのであり、その結果、各製造業者は自分の指揮する労働者の賃金を最低に定めようとするのである。」 (*Ibid.*, t. XI, (Publication des manuscrits... vol. III) pp. 41-42.)

「エコノミズムという科学は、下劣者、冒険賭博師、野放しの犯罪者にすぎない買い占め人、相場師どもには深い天才があると考えている。1826年にそのもっとも際立った証拠が見られた。10年間平静だった後に、完全な平和の中にあつて突然に停滞と閉塞が起こったのであり、それはすべての新聞が

両アメリカの解放によって商業に開かれた新しい機会を勝ち誇っていただけに一層意外なものだった。非常に誤解されたこの恐慌の原因は何だったのか。それは商業の次の2つの性格の複合作用から生じていたのだ。

『多血症的逆流 Le refoulement pléthorique, 流産の余波 le contre-coup d'avortement』。

『逆流』とは、自分たちに販路が開かれると、まずそこに消費が許容する4倍の商品を送る商人たちの盲目的貪欲の周期的作用である。…（つまりイギリスとフランスのキュロット商人たちがその貪欲の故に1825年アメリカに年間消費量の4倍もの商品を送ってしまった。）その結果、布地の販売不振、滞貨、品質悪化、そして販売者の破産となったのであり、それは消費可能量について幻想を抱く商業の無思慮によって常に引き起こされるこの多血症的逆流の必然的結果である。妬み深く欲に目のくらんだ売人たちの群がいかにして輸出において立てるべき限界を判断できようか。…多血症的逆流の危機によって引き起こされた販売不振は、製造所を操業停止させ、値上がりや当て込んでいて安値で売れることもできなくなっていた綿花買い占め人たちを倒産させずにはいなかった。アメリカで流産させられた陰謀が『余波によって』ヨーロッパで同じ破産を引き起こしたのである。』(Ibid., t. VI, pp. 392-393)

- (4) 確かに一見するとどちらも「労働者が自分の生産手段を私有している」旧い小経営の否定による「個人的で分散的な生産手段の社会的に集積された生産手段への転化」（『資本論』、『全集』第23b巻, pp. 993-994）だと言いうように思われた。しかしその両者の隔たりがあまりに大きかったことはこの数年の世界史が不幸なほどあからさまに証明してしまった。それは確かに「『資本論』に反した」ことの報いであるのかもしれないが、しかしそれはまた、後のマルクスの提示した歴史観が、王政復古期にあらわになった産業主義と反産業主義のアポリアに対する彼なりの解決法なのであり、そこには産業主義的要素と反産業主義的要素とが微妙に（敢えて言えばかなり目的論的に）配置されているということへの無理解からする不幸であったようにも思えるのである。

- (5) 同上書、『全集』第25b巻, p. 1051.

- (6) ここで彼が『概論』出版時点で「文明の偏見」との衝突を避けるためにやむなく削除したと思われる一連の手稿、『愛の新世界』の位置づけも含めて、彼の社会観の全体像について若干補足しておこう。彼は人間の社会関係 sociabilité, つまりは社会的結合の実体を、「友情」, 「野心」(つまり名誉を求める情念), 「家族愛」, 「愛」という4つの「愛着情念 passions affectives」を軸に形成される情念的「絆 liens」のネットワークに求めている。これらの基本情念の機能については、『概論』の最終部分、第4篇「情念的均衡 l'équilibre passionnel について」の主題を成すのだが（以下のとくに指示のない引用はその部分, Fourier, Ch., *Œuvres...* t. V, pp. 377-559 から), そこでの問題は、「調和社会の素晴らしい問題」, 「すべての調和人がいかにして友情と名誉とに忠実となり、いかにして愛と家族心が和合 concorde と集団的愛着 affection collective の萌芽となるかを説明すること」, つまり具体的には、上記の4情念が一つの歯車のように結合して働く「4つの協和のカドリール quadrilles d'accords」によって作り出される社会構成員間の「結集 ralliement」が、「富者と貧者、若者と老人」といった現

状では相容れない反感、対立のうちにある諸階級、諸階層を、「愛着、協同的共感 sympathies corporatives」で結びつけるようになる（これは最終的には、彼がそのユートピアの中に仕掛けた様々な装置によって現出される「共感的幻想 illusions sympathiques」,「人為的幻想 ILLUSION CRÉÉE」を共有した「熱狂」のなかで諸個人間の一切の隔壁が陶酔的に消滅する状態にまで達しなければならない）、そのメカニズムを説明するということである。そしてこれによって、「全人類を一つの兄弟家族にする」と称した「政治、道徳の諸科学が文明において作り出した甘いフラテルニテ」が真に乗り越えられ、「アソシアシオンの集団的目標」が完成されることになるのである。そしてこの途上で、4つの情念のうちもっとも強力な発条としての役割を果たすのが「愛」であり、そしてもっとも基本的な必要条件が、彼の言う「調和社会のもっとも重要な問題、『労働、資本、才能』という3つの産業的能力に比例して段階付けられた均衡分配 répartition équilibrée et graduée en raison des trois facultés industrielles のそれ」であった（フーリエの特異な分配論については大塚昇三氏の「シャルル・フーリエと階級調和の方策」（『経済学研究（北海道大学）』、第37巻2号、1987）「シャルル・フーリエの『愛の新世界』と資産分配」（『経済学研究（北海道大学）』、第39巻4号、1990）に丁寧な説明がある）。そして「愛」には、「不平等者間の団結 union entre inégaux のもっとも強力な発条」として、諸階級の利害対立を「吸収する absorber」という他とは「別の使用法」（他の機能は「調整する réguler」こと）が詳しく説明されるべきだったのだが、「自由恋愛の理論は猥褻の理論だ」とみなすような「偏見」の存在ゆえに愛のカドリール部分は削除せざるをえず、当面は4つのカドリールのうちの友情と野心との「半分だけでも組織できれば」初期のうちは満足しようということ、愛と家族愛の部分については心ならずも不満足な叙述に終わったというのが彼の説明であった。彼は自己の分配原理を「総量に比例し隔差に反比例した超統一的分配 répartition hyper-unitaire en raison directe des masses et inverse des distances」（Fourier, Ch., *Œuvres...*, t. V, p. 502）と呼ぶのだが、この原理は彼にとっては「人類が自由な恋愛と自由な父性愛の調和社会に移行する時代にしか」（*Ibid.*, t. VI, p. 320）実現されない。『愛の新世界』の中でも繰り返し述べているように、彼にとっての「社会的徳」とは、社会構成員相互間の精神的、情念的絆を殖やし、強める行為である（例えば *Ibid.*, t. VII, pp. 119-120）。王様と貧しい羊飼いの娘の間にさえも一瞬にして強い「絆」を作ってしまう「愛」というもののほど素晴らしい徳の現れはない。次々と求愛者の集団に身を任せることを職務とする愛の天使（彼はそれを「徳の天使」と呼んでいる）や、愛と家族愛との「2つの愛着のアマルガム」であるがゆえに堂々と容認される近親相姦や、「愛の宮廷」で繰り広げられる大乱痴気騒ぎや、ベッドで恋人のかかとをひっかくのが好きな世界中の変態者たちが種々の「かかとの相違」の判定にもとづいて作る系列などありとあらゆる奇妙なものを含んだ社会構成員間の情念の絆、「社会的絆」の細密なネットワークの中で、彼の考える「分配の公正」が維持され、そしてまたその土台の上に「必然性の国」を通り越した巨大な情念の城のような彼の理想社会が聳え立っているのである。

- (7) あえて簡単に言ってしまうと、産業主義が物の不足をいかにして解決するかを夢見た思想であるとすれば、一方フーリエが描写するユートピア人たちの生活、行動を見ていると、彼はまるで物が満た

された社会の予言者のようである。

(8) *Ibid.*, t. VI, p. 15

## 〔5〕 産業主義と社会主義 ―結びにかえて―

産業と生産力、それは希望の星なのか、破滅への道なのか。本稿冒頭で述べたように、この近代社会主義の形成点におけるのと同じような問いかけが再び現れてきたようである。我々は、19世紀の人々が解決を目指した貧困も不平等も十分に解決できないまま（というよりもその問題構造を地球的に拡大させていくことによって）、新たな問題に直面してしまったらしい。産業主義の目標が、西欧社会が先行した「産業化」という歴史過程をそのまま人間の住む地球上のすべての地域に拡大して繰り返すということであれば、それはもはや地球環境が許容しないであろうし、またすでに産業化を経た地域では、これ以上の生産力の拡大の不要を言う主張が現れている。とはいえ、他者や他国に永遠の貧困を強いる権利など誰も持っておらず、また産業というものの機能が人間生活の基礎的土台を提供するものである以上、産業「主義」の放棄はありえても産業の放棄はありえない。当然であるが、課題は一新されたのではなく重層化してしまったのである。

私は本稿で、セー、サン・シモン、サン・シモン派、シスモンディ、フーリエら王政復古期の思想家たちについて、産業主義とそれへの対抗という視点から整理を試みてきたのだが、ここでの結論として述べておきたいのは、シスモンディやフーリエがこだわっているように、生産（生産と生産力の概念的区分が後のものである以上そこには当然生産力が除かれぬ）を規制し、生産よりもより高次の価値を求め、それにとらわれない人間活動の豊かな展開を夢見ること、それが、産業主義の単線的な発展に対抗して社会主義諸思想のヴァリエーションを生み出させる源であったということである。産業と生産力、それは希望の星であるとともに怨嗟的であった。新しい産業に基づく生産力発展の道が、人間に新しい可能性と明るい未来を開くのか、それとも苦悩と破滅に落とし込むのか、この時点でそれには相いれない両方の答えが同時に用意される。そして七月王政下、現にある矛盾に目をつぶらず変革を求める人々は、提示された諸要素の様々な総合を試みようとする。もちろんマルクスもまたその一人なのである。

我々は今後ますます「持続可能な成長」の範囲に経済を押しとどめることを真剣に論じなければならなくなるだろう。生産力の伸長よりもその管理能力を問わなければならなくなる。私は本稿で社会主義の中にある反産業主義に由来する諸要素を強調してきたが、もちろんマルクスを含めてその後の社会主義が反産業主義の単線的な発展ではなかったのは言うまでもない。そのような思想は現状批判の道具にはなっても、そのみで現存在としての国家や国民経済全体を動かす原理にはなりえなかったからである。しかし現在の人間社会が解かねばならない課題の変化は否定しがたい。本稿で述べたように、かつてシスモンディが、アダム・スミスの時代は「富の形成」に関心を持ち始めたばかりの「過渡期」にすぎなかったと考えたことから経済に対する新しい見方が開かれていった事実、そして「我々の知識と産業との過剰は、極めて健康的な食物でも度外れに食べると気持ちが悪くなるように我々にとって有害なものとなった」と考えたフーリエが極

めて強靱なユートピアを提示したという事実を、我々は思い起こす必要があるように思う。我々には、再び産業主義と反産業主義との「融合」（それは当然かつてサン・シモン派がおこなったのとは異なる要素を含むだろう）を試みるのが求められている、私にはそう思われる<sup>(1)</sup>。

- (1) 晩年の高島善哉氏は、「産業とイデオロギー」の関係を問題とし、「産業化とは何か、と改めて問い直すこと」が現代の社会科学者の根本問題だと述べた（高島善哉「イデオロギーとは何か」、『一稿論叢』、第100巻4号、1988年）。私は氏の示すサン・シモン主義的な産業観をもはやそのまま共有しえないが、しかし、「産業化」と呼ばれる、現代の社会理論を形成させる母胎となってきた18世紀後半から現代に至るまでの社会の変化を全体として捉えるのに、一步振り出しに戻った形で、そもそもその「産業」なるものにマルクスを含めて各々の理論家がいかなる思想的な態度を持って臨み、自己の理論を形作っていったのかというところから捉え直す必要があるという意味に、氏の生涯最後の発言を解釈している。

（いわもと よしひろ 一橋大学社会科学古典資料センター助手）

---

一橋大学社会科学古典資料センター *Study Series. No. 32*

発行所 東京都国立市中2-1

一橋大学社会科学古典資料センター

発行日 1994年12月15日

印刷所 東京都八王子市石川町2951-9

三省堂印刷株式会社

---

